

ドストエフスキイ研究会便り(5)

「一粒の麥」の死の譬え

— ユダ的人間論とイワン —

研究会便り(5)から(7)について

今回から三回にわたり、ドストエフスキイ文学がどのような現代的意味を持つのかについて、ヨハネ福音書の「一粒の麥」の死の譬えから入り、新約の諸書を経て、『カラマーゾフの兄弟』の次兄イワンに至るまでを視野に、「ユダ的人間論」の角度から考えてみたいと思います。最初にこれら三回の概観をしつつ、問題となる「ユダ的人間論」とは何かを簡単に確認しておきます(三回の具体的な構成については、「全体の目次」も御覧下さい)。

今回の「研究会便り(5)」・第1章は導入部として、『カラマーゾフの兄弟』の冒頭エピソードに挙げられた「一粒の麥」の死の譬えに焦点を絞り、この譬えがヨハネ福音書の中でどのような位置に置かれ、どのような意味を与えられたのか、簡単ですがそのポイントを幾つか検討したいと思います。そこから浮かび上がるのはイエスとユダやペテロたち、つまり「神の国」の宣教に命を賭ける師と弟子たちとの十字架を挟んだ対決であり、ここで我々読者は師を裏切り死に迫いやってしまう弟子たちのドラマと重ねて、他ならぬ読者自身もまた、「永遠の生命」に向かい自らの「一粒の麥」の死を迫られていることを知でしょう。「ユダ的人間論」と呼ぶ永遠の問題がここにあります。

次回の「研究会便り(6)」・第2章では、師イエスを裏切り、十字架上に迫いやってしまった弟子たちの罪意識の問題が新約聖書の中でどう扱われているか、このことを諸福音書と使徒行伝の中で、更にはパウロの書簡等の中で確認する予定です。

基本的に新約聖書とは、まずは十字架に至るイエスの言動、その死からの復活顕現を核として扱った書物と言えるでしょう。福音書記者や書簡の筆者たちは、この復活のイエスとの遭遇体験を新たな決定的出発点とし、神の人間救済の経緯についての認識を深めてゆくのですが、その中でイエスその人の行動と言説の記述についても、彼を「神の子」・「救世主」として捉え、「キリスト論」的な解釈を強く打ち出してゆく傾向があります。新約聖書が伝えるこのような原始キリスト教成立の過程で、大きく背後に後退させられてしまったのが、師イエスを裏切った弟子たちが追い込まれたであろう痛切な罪意識とその清算のドラマではないでしょうか。第二回目は、「ユダ的人間論」の帰趨について、更には人間の内なる闇と光の分裂の問題について、その軌跡あるいは痕跡を新約世界の中に求める作業です。

最終回の「研究会便り(7)」・第3章では、この「ユダ的人間論」の角度から光を当てる時、ドストエフスキイ文学の内には何が見えてくるのか、それは現代に生きる我々とどう関係するのかについて考え、その典型例として『カラマーゾフの兄弟』の次兄イワンに的を絞りたいと思います。「神と不死」の熱烈な探究者であるこの「ロシアの小僧っ子」が辿る闇と光のドラマから見えてくるものとは、「肯定と否定」、「聖と俗」の恐ろしい分裂に苦

しむこの青年もまた、十九世紀ロシアに生きる一人のユダに他ならないという事実です。そしてイワンの辿った運命とはそのまま、「時代と不信の子」我々現代人が新たなユダとして辿りつつある運命であることを確認したいと思います。

全体の目次

研究会便り(5)・第1章・・・「一粒の麥」の死の誓え

問題提起

1. 「一粒の麥」の死の誓え

ヨハネ福音書の文脈の中で
 ヨハネのメッセージ
 愛、十字架、永遠の生命

2. 時間と関係の多層性

過去・現在・未来、「時間の多層性」
 神・イエス・弟子・読者、「関係の多層性」
 第四の層、師と弟子たちとの「断裂」
 第2-3章への展望

研究会便り(6)・第2章・・・新約聖書のユダたち

3. 福音書の^{ユダ}弟子たち

ヨハネ福音書のユダ
 マルコ福音書の^{ユダ}弟子たち
 マルコ福音書の「空白」
 マタイ福音書と使徒行伝のユダ
^{ユダ}弟子たちのその後、師との再会の光と闇
 福音書、イエス復活顕現の光と闇

4. 使徒行伝や書簡の^{ユダ}弟子たち

使徒行伝のペテロ、イエス復活顕現の光と闇
 「ケーリュグマ」が記す「我らの罪」
 闇と光、極性の弁証法
 「ヘブライ人への手紙」の罪意識

5. パウロの十字架

「天からの光」
 フィリピ人への手紙から
 ガラテア人への手紙から

ローマ人への手紙から

十字架に「つけられる」のか? 「つける」のか?

研究会便り(7)・第3章・・・カラマーゾフのユダ・イワン

⑥. 新約からカラマーゾフの世界へ

聖俗二つの死

イワン (一)、「ホザナ!」への希求

イワン (二)、「キリストの愛」の否定、ユダ・イワン

イワン (三)、ユダ・イワンの帰郷と挫折

「悪業への懲罰」

おわりに

〈参考文献〉

〈付記〉

「一粒の麥」の死の譬え

— ユダ的人間論とイワン —

第1章. 「一粒の麥」の死の譬え

問題提起

ドストエフスキイ (1821-1881) の遺作『カラマーゾフの兄弟』(1880) の冒頭には、ヨハネ福音書第十二章 24 節に記されたイエスの「一粒の麥」の死の譬えが置かれている。この譬えから浮かび上がるのは、イエスに主な光を当てれば、イエスを神から遣わされた救世主とする「キリスト論」、弟子たちに焦点を絞れば、師イエスを裏切る「ユダ的人間論」であり、これらは共にキリスト教成立の根幹をなす表裏一体の問題と言えるであろう。だが福音書記者ヨハネは栄光のキリスト論に大きく傾き、我々の目からするとユダ的人間論、師を裏切り十字架の上に磔殺させてしまった弟子たちが、その後罪意識を抱えて辿ったであろう痛ましい道程については背景に後退させてしまったように思われる。ヨハネ福音書を始めとして、新約聖書の背後に隠された「弟子たち」の裏切りのドラマに深い測鉛を降ろし、「聖なるもの」を前に人間精神が演じる闇と光、極性のドラマを誤魔化しなく追ったのがドストエフスキイではなかったか。本論はこの角度から、「キリスト教文学」としてのドストエフスキイ文学が現代において持つ意味を考えてみたい。その作業はまず導入部として、ヨハネ福音書の「一粒の麥」の死の譬えの検討から入り(今回、第1章)、広く新約聖書におけるユダ的人間論の検討に進み(次回、第2章)、最終回の第3章で、イワンが辿る「肯定と否定^{コントラ}」の道程を検討し、これを我々現代人の問題として確認するという手順で進めたい。

目次

[ページ]

1. 「一粒の麥」の死の譬え

ヨハネ福音書の文脈の中で

5 ~ 6

ヨハネのメッセージ

6 ~ 8

愛、十字架、永遠の生命

8

2. 時間と関係の多層性

過去・現在・未来、「時間の多層性」

8 ~ 9

神・イエス・弟子・読者、「関係の多層性」

9 ~ 11

第四の層、師と弟子たちとの断裂

11

第2-3章への展望

11 ~ 12

1. 「一粒の麥」の死の譬え

ヨハネ福音書の文脈の中で

ドストエフスキイが「一粒の麥」の死の譬えを『カラマーゾフの兄弟』の冒頭に置いた意図とは何であったのか。この問題にアプローチするためには、この譬えがそもそもヨハネ福音書の中で如何なる位置にあるかを確認しておく必要があるだろう。まずは小さな文脈で、つまりヨハネ第十二章 24 節とそれに続く 25 節とをセットで見よう。

「人の子の榮光を受くべき時きたれり。誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麥、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん。もし死なば、多くの実を結ぶべし。己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし」(ヨハネ十二 24-25)

これら二節が示すのはまずはイエスが、そして弟子たちが「永遠の生命」を与えられるための条件であり、そのためには「この世にてその生命を憎む」こと、つまり「一粒の麥」として「地に落ちて」死ぬことが不可欠だとされるのである。「榮光」「永遠の生命」。これらの言葉と表裏一体としてあるのは、この上なく厳しい死への覚悟と勧告である。

次にこの譬えを更に広く、ヨハネ福音書全体の構成の中で見てみよう。

これはいよいよエルサレムに最後の入城をした直後、イエスがギリシア人たちや弟子たちに向かって発した言葉であり、イエスのいわゆる「公的活動」の終りをなし、かつエルサレムにおいて始まる「受難物語」の出発点ともなり、ヨハネ福音書の文字通り中間部に位置するものである。ゴルゴタの丘を向こうに置き、イエスがこの譬えによって自らの活動を総括し、身近に迫った十字架上の死を予告すると共に、弟子たちに対しても死に対する覚悟を正面から迫るのだ。これを記すヨハネによれば、イエスにとっても弟子たちにとっても、地上の生は「一粒の麥」としての死、つまり十字架を己の身に負うことに帰結し、このことが神から「榮光」を、「永遠の生命」を付与される必須の条件なのである。構成上、位置的のみか意味的にも、ヨハネ福音書の中心をなす譬えと言うべきであろう。

これに対応するイエスの言葉を他の福音書に求めるとすれば、マルコ福音書のこれもまたほぼ中心部に置かれた第八章の内に見出せるであろう。ここでも自らの受難を遠く見据え、弟子たちに次のように迫るイエスが報告される。

「人もし我に従ひ來らんと思はば、己をすて、己が十字架を負ひて我に従へ。己が生命を救はんと思ふ者は、これを失ひ、我が爲また福音の爲に己が生命をうしなふ者は、これを救はん」(マルコ八34-35)

この言葉が示すものもまた、イエスに従おうとする人間が取らねばならない厳しい道。

「己が生命を救わん」とする人間が迫られる「己をすて、己が十字架を負ふ」という厳しい逆説——「永遠の生命」が与えられる厳しい条件の提示において、ヨハネもマルコも異なることはない。

ヨハネのメッセージ

今度はヨハネが伝える使信全体の流れの中で、この譬えを確認しておこう。

「もろもろの^{ひと}人をてらす^{まこと}眞の^{ひかり}光ありて、世にきたれり」(一-9)

「ロゴス讃歌」と呼ばれる序文(一-1-18)から始まり、ヨハネ福音書が一貫して提示するイエスとは、「亡び」を運命づけられた人間に「神の愛」と「救ひ」を、すなわち「永遠の生命」をもたらすべく地上に遣わされた「神の子」、「眞の光」としてのイエスである。

「それ^{かみ}神はその^{ひとりご}獨子を^{たま}賜ふほどに^よ世を^{あい}愛し^{たま}給へり、すべて^{かれ}彼を^{しん}信ずる^{もの}者の^{ほろ}亡びずして^{とこしへ}永遠の^{いのち}生命を得んためなり。^{かみ}神その^こ子を^よ世に^{つかは}遣したまへるは、^よ世を^{さば}審かん^{ため}爲に^{あらず}、^{かれ}彼によりて^よ世の^{すく}救はれん^{ため}爲なり」(ヨハネ三16-17)

神の「愛」、そしてイエスを介した「永遠の生命」の付与による人間の「救ひ」。この救済史観の線上に、地上における「神の子」、「眞の光」たるイエスの^{わざ}業を一貫して描くのが福音書記者ヨハネであると言えよう。このヨハネはイエスが最後のエルサレム入城直前、郊外のベタニア村に赴いたと記す。マルタとマリア姉妹、そして病の内にあるその兄弟ラザロを訪ねるためである。ところがラザロは墓の中にあること既に四日、死臭を放っていた。ヨハネはイエスが、墓の中のラザロを向こうに置き、彼を死から呼び戻すにあたり、マルタに次のように問い迫ったと記す。

「我は^{われ}復活なり、^{よみがへり}生命なり、^{いのち}我を^{われ}信ずる^{しん}者は死ぬとも^{もの}生きん。^い凡そ^{およ}生きて^{われ}我を^{しん}信ずる^{もの}者は、^{とこしへ}永遠に^し死なざるべし。^{なんぢ}汝^{しん}これを^{しん}信ずるか」(ヨハネ十一-25-26)

神からイエスへ、そしてイエスからラザロへ。ここでもヨハネが伝えるのは、神が与える死を超えた「永遠の生命」である。ラザロの復活とは、ヨハネ福音書の構成上から見ても、イエスの十字架上の死を超えた復活の予告として位置づけられていることは明らかである。ドストエフスキイは既に『罪と罰』において、この「ラザロの復活」を中心テーマとしていることも思い出そう。

さて死せるラザロを「永遠の生命」の内に呼び戻した直後、イエスはエルサレムへの最後の入場を果たす。このイエスが、いよいよゴルゴタ丘上での自らの十字架を向こうにして語るのが、我々の第十二章「一粒の麥」の死の譬えである。今まで確認したヨハネ福音

書の構成上と使信上の文脈を踏まえ、もう一度この譬えを確認しておこう。

「人の子の榮光を受くべき時きたれり。誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麥、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん。もし死なば、多くの実を結ぶべし。己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし」(ヨハネ十二 24-25)

次いで福音書記者ヨハネが報告するのは、第十三章から第十六章にかけての長大ないわゆる「最後の晩餐」、そしてその席でなされるイエスの「告別説教」である。その中から第十五章の次の部分を確認しておこう。これはイエスが世に残す遺訓であり、他の引用部分と共にヨハネ福音書を貫く中心思想と言うべきもの、ヨハネの手紙にもそのまま連なる「愛の勧告」である。(岩波書店刊行の『新約聖書』(新約聖書翻訳委員会、1996)は、これに「父からの愛に基づく相互愛」というタイトルを付している)

「父の我を愛し給ひしごとく、我も汝らを愛したり。わが愛に居れ。なんぢら若し、わが誠命をまもらば、我が愛にをらん。我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。我これらの事を語りたるは、我が喜びの汝らに在り、かつ汝らの喜びの満たされん爲なり。わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互いに相愛せよ。人その友のために己の生命を棄つる、之より大いなる愛はなし。汝等もし我が命ずる事をおこなはば、我が友なり」(ヨハネ十五9-14)

「人その友のために己の生命を棄つる、之より大いなる愛はなし」。神の愛、イエスの愛、そして人間相互の愛——「己の生命を棄つる」ことへの覚悟を迫るイエスの厳しい言葉の背後にヨハネが伝えようとしているのは、イエスが命を賭して証した神から人間に向けられた「愛」であり、この愛の貫徹のために人間が必要とされる絶対的条件、「一粒の麥」の死の提示である。

最後の晩餐と告別説教。そして捕縛と裁判。ゴルゴタの十字架上での死と埋葬。空の墓の報告に続く、マグダラのマリアへの顕現と弟子たちへの顕現(十八章-二十章)——これら全ての報告を終えた後、ヨハネは最後にこう記す。

「此等の事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子たることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが爲なり」(二十31)

かくしてヨハネが伝えようとするイエスとは、何よりもまず闇に沈む人間への神の愛を証すべく、ゴルゴタ丘上の十字架で磔殺されるに至るまで、地上の生を歩み抜いたイエス

であり、またその「一粒の麥」としての死によって、神から死を超えた「永遠の生命」を与えられ、今やこの世に新たに「榮光」の「神の子」、「眞の光」として君臨し、人々に「光」と「永遠の生命」を付与しつつある「救世主」イエスである。イエスの死から既に半世紀以上、ヨハネにはイエスと神の存在が、そしてイエスと神との関係が、明晰な遠近感と熱い現前感の下に捉えられていたと言うべきであろう。

愛、十字架、永遠の生命

神の愛、イエスの愛、そして人間相互の愛。神来の愛が地上に貫徹する絶対的条件としての「一粒の麥」の死——かくして「愛の福音書」とも呼ばれるヨハネ福音書が持つ厳しい側面が浮かび上がってくる。「闇」の中に沈み「亡び」を運命づけられた人間が、「光」と「救ひ」を与えられるためには、言い換えれば人間が神の愛を受け止め「永遠の生命」を付与されるためには、イエスに倣い「一粒の麥」としての死を身に引き受けることが求められているのだ。福音書記者マルコにおいて、イエスが弟子たちに対し「己をすて、己が十字架を負ひて我に従ふ」ことを迫ったのと同じく、ヨハネのイエスもまた弟子たちに対し、自らの地上の生命を「一粒の麥」として棄てる覚悟を迫っているのである。これら福音書記者がイエスを介して伝えるのは神の愛であると同時に、「永遠の生命」を向こうに置いた、この上なく厳しい死への覚悟と勧告でもあることを改めて確認しておこう。

2. 時間と関係の多層性

過去・現在・未来、「時間の多層性」

「一粒の麥」の死の譬え。そこに込められた「愛」と「死」と「永遠の生命」の逆説。このことを明解に理解するために、この譬えが含む時間と関係の多層性・重層性にも注意を向けておこう。

まず時間の多層性である。

ゴルゴタの丘を向こうに、弟子たちに対して「一粒の麥」の死の譬えを語るイエスとは、ヨハネによれば「神の子」として天上の神から遣わされ、この地上でマリアを母として現在時を生きるイエスである。同時にこのイエスは、これからエルサレムにおいて「一粒の麥」としての死を自らの身に引き受け、死と復活の後再び天の神の許に上げられようとするイエスであり、未来に向かうイエスでもある。だが実はヨハネが伝えるイエスとは、既に十字架上で「一粒の麥」としての死を果たしたイエス、そして神から「永遠の生命」を付与され「救世主」として今を生き、人々を「一粒の麥」としての死を介し、「永遠の生命」へと導くイエスでもあるのだ。未来と過去を含んで現在に現臨し、更にまた未来に向かうイエス。「一粒の麥」としての死を挟んで、天と地、過去と現在と未来とが幾重にも交錯し切り結ぶイエス像がここには提示されているのである。それらを表わす表現は、この福音書において枚挙に暇がない。以下に三つほど見ておこう。

「〔洗礼者〕ヨハネ^{かれ}〔イエス〕につきて^{あかし}證をなし、^{よぼ}呼はりて言ふ
『わが^{のち}後にきたる^{もの}者は我に^{われ}勝れり、我より^{まき}前にありし^{ゆえ}故なり』」
(ヨハネ一15)

「^{まこと}誠にまことに^{なんぢ}汝らに告ぐ、
^し死にし^{ひと}人、^{かみ}神の子の^こ聲を^{こゑ}きく^{とき}時きたらん、^{いま}今すでに^{きた}來れり」(同五25)

「^{われ}我は^{よみがへり}復活なり、^{いのち}生命なり、^{われ}我を^{しん}信ずる^{もの}者は^し死ぬとも^い生きん」(同十一25)

ヨハネが描くイエス・キリストとは、過去・未来のみならず現在をも貫いた絶対時を生きる存在、大貫隆の言う「全時的今」を生きる靈的イエス・キリストであり（『イエスという経験』岩波書店、2003他）、更には天と地、聖と俗、メタフィジカルな世界とフィジカルな世界とを貫いて遍在する「救世主」イエスである。

このように多層的な時間と次元を貫き、「永遠の生命」の内に絶対的に君臨する「神の子」イエス・キリスト。これを記すヨハネとは、イエスの死から半世紀以上の時が過ぎ、イエスを介した神の人間救済の経綸の不思議に焦点を合わせるに至ったヨハネであり、ここに彼の福音書が持つ底知れぬ奥行きと豊かさと神秘の源があると言えよう。だがこのこと自体が、この福音書を我々現代人にとって、この上なく理解し難い書物とする大きな壁でもあるのだ。

福音書記者ヨハネが告知する「神の子」イエス・キリストとは、R.オットーが『聖なるもの』で言う^{Deviation}、いわゆる靈的感受性も靈的認識能力も鈍麻させてしまった我々現代人の多くにとっては、時に詩的感興を呼び起こすことはあっても、遠い異国の言葉で語られたお伽噺の主人公のような存在でしかない。我々がそのリアリティを正面から受け止めようと試みても焦点はなかなか絞れず、ただ恣意的な枠で徒に切り刻んでしまい、そこには無残で貧困なイエス・キリスト像の残滓が残るだけである。まして神の圧倒的な君臨感の下に「神の子」イエス・キリスト像を提示するヨハネ福音書から、近代的理性の枠に収まる合理的・歴史的イエス像を構成しようとしても、我々が直面する困難さは限りがなく、ほとんど絶望の内に投げ入れられるだけと言えよう（オットーの言う^{Deviation}の訳語は多様である。「預覚」；山谷省吾、「予覚」；久松英二、「直感」；華園聰麿、「靈覚」；小出次雄）。

神・イエス・弟子・読者、「関係の多層性」

かくしてヨハネが提示する「一粒の麥」の死の譬えにアプローチするにあたって、我々は大きな障壁の前に立ち止まらされる。今記したように、メタフィジカルなもの・超越的なものに対する人間の認識能力の限界性の問題、殊に近代以降我々が急速に鈍麻させてしまった靈的感受性と靈的認識能力の再獲得という厄介で困難な問題との直面を避けられ

ないのだ。この困難さと複雑さを少しでも解きほぐすために、我々はヨハネ福音書を貫く「時間の多層性」に加えて、一つの事柄の別の側面であるが、更にこの譬えが宿す「関係の多層性」にも目を向けてみよう。人間存在の様々な「関係性」に着目することは、近代以降我々が研ぎ澄ませてきた人間と世界理解のための、一つの有力な社会学的・心理学的・人間学的・哲学的方法であり、この角度からアプローチすることで、複雑で理解の困難なヨハネ福音書へのアプローチも、ある程度助けられるように思われるのである。

「一粒の麥」の死を巡る「関係の多層性」—— まず読み取るべきは、神とイエスとの関係において捉えられた「一粒の麥」としての死であろう。先にも確認したように既にヨハネは、イエスを介した神の人間救済の経緯全体に目が啓かれている。このヨハネによれば、神から迫られた死を引き受けて初めて、イエスは神から「榮光」を、「永遠の生命」を与えられるであろう。だがこう記す福音書記者ヨハネは同時に、イエスが既にこの死を「一粒の麥」として引き受け、神から「永遠の生命」も「榮光」も付与されていることを確信するヨハネでもある。ここにいるのは「一粒の麥」の死の譬えを介して、神とイエスとの厳しい関係を見据えるヨハネである。これを第一の層としよう。

同時にヨハネが提示するのは、ゴルゴタの丘を向こうに、イエスが弟子たちに迫る「一粒の麥」としての死である。先に見たように「告別説教」を記す福音書記者ヨハネとは、弟子たちが「互に相愛」し合い、「永遠の生命」を付与されるためには、まずは「その友のために己の生命を棄つる」ことが必要不可欠であるとし、これを師イエスの「命令」であり「誠命」だとして提示するヨハネである。つまりヨハネにおいて、神とイエスとの厳しい関係が、イエスとその弟子たちとの関係にもそのまま重ねられ、この地上世界において「愛」の関係が成立し「永遠の生命」が可能とされる必須の条件とは、「一粒の麥」としての死であるとされるのだ。これを第二の層としよう。

更に目を向けるべきは、福音書記者ヨハネ自身とその読者、あるいはヨハネとヨハネが属する教会メンバーとの関係である。つまりヨハネは神とイエス・キリストの絶対的君臨感の下に、自らが現在生きる厳しい現実、彼自身の「生活の座」と重ねて福音書を記し、彼の読者たちにもまた、その置かれた現実の中で「愛」を生き「永遠の生命」を付与されるべく、「一粒の麥」としての死を迫っていることを忘れてはならない。ここにあるのも「一粒の麥」の死の譬えを介した、厳しい関係性の認識である。第三の層である。

神の愛と、イエスの愛と、そして人間相互の愛。それと対応する形で、イエスが神から迫られる死と、弟子たちがイエスから迫られる死と、そして読者がヨハネから迫られる死——ヨハネの提示する「一粒の麥」の死の譬えとは、ただ単に甘美な「愛と死」の称揚でも、抽象的な「榮光」や「永遠の生命」付与の約束でもない。ここには「愛」が貫徹され、「永遠の生命」が付与されるための絶対的な条件として「一粒の麥」としての死が提示され、読者は「愛と死」の厳しい緊張が三つの関係性を貫いて存在することの自覚を促されていると言えよう。ヨハネ福音書が提示するイエス・キリスト像理解の困難さとは、ヨハネ自身への神とイエス・キリストの君臨感の下に、これら厳しい関係の多層性が提示され

るところにあるばかりでない。その困難さはこれら関係の多層性が、先に見た時間的多層性とも密接かつ複雑に交錯することから生まれる困難さでもあるのだ。だが繰り返しとなるが、それは困難さであり厳しさであると共に、ヨハネ福音書の奥深さと豊かさでもあり、これら幾重にも積み重なる多層性を丁寧に解きほぐすことの中から初めて、ヨハネが伝えようとする神とイエス・キリストの活きたリアリティが、我々現代人の内に伝わる可能性もあると言えるであろう。

第四の層、師と弟子たちとの「断裂」

「一粒の麥」の死。この譬えが持つ「時間の多層性」に加えて、「関係の多層性」を確認してきた。我々はここで後者の「関係の多層性」三つの中で、第二の層の背後に大きく後退しているもう一つの関係性、イエスと弟子たちとの間に生じた底知れぬ、絶望的とも言うべき関係性の「断裂」に目を向けることを忘れてはならない。敢えて言えばこの第四の層こそが、実はヨハネ福音書に含まれる時間と関係の多層性全てを支える隠れた梃子であり、光を支える闇、つまりは逆説的核心ともなっていると考えられるのである。

次回に詳しく検討するが、ニュアンスの差こそあれ、ヨハネばかりでなく全ての福音書が一致して伝えるのは、イエスに従った弟子たち全員が、いざとなると師を裏切って逃げ去ってしまったという事実である。師イエスが神から迫られ、そして弟子たちに迫った「一粒の麥」としての死、つまり十字架を負うことを、弟子たちは自らの身に引き受けはしなかったのだ。この関係性の悲劇的絶望的断裂・挫折を超えて、彼らは如何に新たに「一粒の麥」としての死・十字架を自らの身に担い直し、本来のイエスとの、そして神との関係性に立ち帰ったのか。闇は如何に克服され、光に変わったのか。

繰り返し確認しているように、既にイエスを通して成就した神の人間救済の経緯を確信するヨハネは、闇の中に輝く光としてのイエス・キリストを前面に押し出す中で、この闇については、つまり弟子たちの裏切りと、その後彼らが辿った罪の清算のドラマについては、光の背後に大きく後退させてしまったように思われる。だがこの層が見失われ、闇から光への逆転のドラマが忘れられる時、初期キリスト教生成の根本的ダイナミズムへの視点が失われてしまうであろう。少々先走って記せば、この譬えをドストエフスキイが自らの遺作の冒頭に用いた意味も、その譬えの具体的なドラマ化に注いだ莫大な努力も、更にはこの譬えが我々現代人にとって持つ意味も、それぞれ大きく見失われてしまいかねないであろう。

第2-3章への展望

イエスとその弟子たちとの関係の悲劇的絶望的断裂。イエスに対する弟子たちの裏切りについて記すどの福音書も、イエスの復活顕現と昇天を巡る輝かしい使信とは対照的に、弟子たちが師への裏切りの後に辿ったであろう悲痛な道行きの詳細は正面から描いているようには見えない。福音書を始めとし新約聖書においては、パウロの書簡を除いて、ほと

んどが「ユダ的人間論」のドラマは闇の中に葬り去られてしまっているように見える、あるいは少なくとも我々にはその道程をストレートに読み取ることは至難の業のように思われるのである。

更に言えばドストエフスキイ文学を貫く中核的な問題の一つとは、イエス像の追求と表裏一体の形でなされた、正にこの「一粒の麥」の死を巡る関係性の断裂という第四の層の正面からの追求であり、この作家の筆が刻む主人公たちの阿鼻叫喚のドラマ世界は、新約世界の磁場に置かれ、弟子たちのイエス裏切りと、その後彼らが辿ったであろう罪意識清算のドラマと重ねて読まれる時に初めて、その持つ意味の本来の広がりとお行きを開示すると言っても過言ではないであろう。

(第1章、了)

2016年11月

2018年12月一部加筆修正

次回、研究会便り(6)について

「一粒の麥」の死の譬えに焦点を絞り、イエスと弟子たちとの関係性の断裂の問題について確認した今回を受けて、次回は、師を裏切って十字架上に追いやってしまった弟子たちの罪意識の帰趨について、諸福音書と使徒行伝やパウロを始めとする書簡の中から、幾つかの典型的と思われる報告を検討し、新約聖書における「ユダ的人間論」について考えます。